

主 題：脱ぎ捨てるべき古い人

聖書箇所：コロサイ人への手紙 3章5－7節

テーマ：キリストによって新しくされた者は罪に対してどのように応答して生きていくのか？

今朝、見ていきたいのはコロサイ人への手紙3章のみことばです。今回と次回にわたって、タイトルにもあるように、脱ぎ捨てるべき古い人について5－11節を通して考えてみたいと思います。内容に入って行く前に、前回の流れを思い出すために、1－11節のみことばをいま一度お読みします。

コロサイ3：1－11

「:1 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。:2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。:3 あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。:4 私たちのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます。:5 ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。:6 このようなことのために、神の怒りが下るのです。:7 あなたがたも、以前、そのようなものの中に生きていたときは、そのような歩み方をしていました。:8 しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを、捨ててしまいなさい。:9 互いに偽りを言うてはいけません。あなたがたは、古い人をその行いといっしょに脱ぎ捨てて、:10 新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。:11 そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」

さて先週、新しくされた者の新たな生き方について考えました。十分なキリストによって救われて、十分なキリストによって新しくされて、その十分なキリストとともに歩いていく生き方がどんなものなのか、特にその責任と希望というものについて、パウロのことばから学びました。どんな責任だったか、覚えているでしょうか？新しくされた者は、上にあるものを、天におられるイエス・キリストを日々求め続けていこうとする者でした。自分自身の歩みが、自分の考えや思いに支配され続けるのでも、一時的で消えてしまうようなこの世のことに囚われ続けるのでもなくて、ますますキリストの考えや知恵に支配されていくことをいつも追い求めていくのです。すべてを支配されている、偉大なキリストの姿に思いを留めて、いつか必ずお会いするその日が来るのを楽しみにしながら、その日が来るまではキリストが聖くあられるように自分を聖くしようと忠実に歩いていくのです。それこそがキリストによって新しくされた者が、みんな持っている大切な責任でした。

でも同時に、この責任を考えると、その歩みが私たちにとって容易ではないこともよく知っています。主に喜ばれる者として成長していきたい、変わっていきたくて願っていても、数多くの試練や戦いがそこには待ち受けているのです。また、何よりも私たち自身が直面する最大の問題は、罪との戦いでした。救われた者はみんな今はもう罪の奴隷から解放されたと、みことばは確かに教えています。かつて罪を愛していて、それに支配されていた者は、ただ恵みによってキリストを信じる信仰によって新しくされました。罪を憎んで神様の敵として歩んでいた者が、神様を心から喜ばせたいと願う者へと造り変えられたのです。それはすでに救いにおいてすべて起こったことでした。でも、残念ながらこれは何も罪との戦いがいっさいなくなることを意味するものではありませんでした。私たちはこの地上にある限り、罪とのさまざまな葛藤を経験し、それによって苦しめられ、敗北も多々味わうのです。この戦い

には例外はありません。あのパウロですら同じことを経験していました。彼も自分自身の持っていた苦しみや難しさを素直にあかしてきていたのです。例えばローマ7：19-20で、「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。」と、はっきりと記していました。新しくされた者として、キリストに似た者へと成長していきたいと、忠実に歩いていけば歩んでいくほど、そこには罪や誘惑との戦いが待っています。それを私たちは経験するのです。そしてそれに何度も負けてしまえば、次第に自分のうちに罪悪感が増し加わって、喜びや平安も失われていきます。皆さんも今までにそんな経験をしたことはあるでしょう。

○脱ぎ捨てるべき古い人：新しくされた者の罪に対する応答

いったい私たちはそのような罪との戦いに対して、新しくされた者としてどのように向き合うべきなのでしょう？罪に対してどのように応答するべきなのでしょう？どうすれば私たちは罪に対して勝利し続けることができるのでしょうか？感謝なことに、みことばはその答えをはっきりと教えてくれました。パウロは、今から私たちが見ようとしているこのコロサイ3：5-11を通して、特に新しくされた者たちが罪に対してとるべき応答を大きく二つ挙げてくれました。いったいそれらはどんな応答でしょう？これは私たちみなに関わることです。信仰者として生きていくのであれば、果たしてこの応答を私たちのうちに見ることができるのでしょうか？きょうは最初の一つ目の応答を、来週は残ったもう一つの応答を見ていきたいと思えます。このみことばを通して、私たちがますます罪に勝利して、キリストにあって変えられた者として、新しくされた者として、喜んでキリストのために生きていく励ましと助けになることを心から祈っています。

1. 自分自身の罪を殺してしまう 5-7節

では早速、罪に対する一つ目の応答を見てみましょう。それは自分自身の罪を殺してしまうということです。新しくされた者は、自分自身のうちにある罪をそのままにしておくのではなくて、完全に取除くということです。5節をよく見てください。「ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。」と書かれていました。この箇所も「ですから」という大切な接続詞で始まっていました。「ですから」と始まったら前に注目するのです。つまり、パウロはここで、先週学んだ1-4節の内容を踏まえて信仰者たちに語っていたのです。兄弟姉妹の皆さん、前に見たように、あなたがたはもうすでにキリストとともによみがえらされて新しい者とされました。あなた方のいのちは神様のうちにかくされていて、将来キリストとともに栄光にあずかる、そんな揺るがぬ希望を持っていますと。今はもうこの世ではなくて、天に国籍を置く者へと変えられました。それなら天にあるものを熱心に求めていきなさい、新しくされた者として、新しくされた者にふさわしくないかつての古い性質を、罪を殺してしまいなさいと。

パウロはここではっきりと「殺してしまいなさい」と口にしていました。一つの提案として挙げていたのでも、単なる助言の一つとして口にしていたのでもありません。そのことをしなさいと、彼は強く命じていました。でも「殺してしまいなさい」というこの厳しいことばは、いったい何を意味しているのでしょうか？このことばにはもともと何かの息の根をとめるとか、何かの活動を完全にやめさせる、とめるといった意味が含まれています。文字どおり何かを死なせるのです。カーティス・ボーンという注解者も、こんなふうに説明しています。「この言葉は、単に邪悪な行いや態度を抑えたり、制御するだけではないことを示唆しています。私たちはそれらを一掃し、古い生き方を完全に断とうとするのです。」。パウロが求めていたことは明白でした。彼は新しくされた信仰者ひとりひとりが新たな歩みにふさわしくない古い自分を、罪を、その息の根を完全に止めてしまうようにと求めていたのです。止めてしまいなさい、断ってしまいなさい、脱ぎ捨ててしまいなさいと。確かにかつて私たちは例外なく、自分自身を中心とする者として歩んでいました。私たちは、自分の思いや自分の考えだけではなく、私たちの目

も、口や手といった地上のからだのいろいろな部分を用いて罪を犯して、神様に逆らい続けていたのです。そのような歩みこそ、まさに以前の古い者としての生き方でした。でもキリストにあって、私たちは変えられ、新しい者とされたのです。救われた者は、自分ではなくてキリストを中心とする者へと神様によって造り変えられました。もう罪の支配に身を委ねる者として歩いていく必要はないし、歩いていくことはできません。だからこそ、キリストの前に喜ばれない自分があるのであれば、神様の助けによってどんな罪であろうと、それを取り除いていこうとするのです。新しくされた者は、自分に対して日々死んで、そして何よりも愛しているキリストにならって、そのキリストに従順に従っていく者として生きていこうとするのです。

パウロはローマ8：13で「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです。」とも言っていました。また、イエス様もまさにそのことをご自身の弟子たちに求めていました。ルカ9：23で「イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と。イエス様がキリストの弟子に求めていたことは、自分自身に対して日々死ぬことでした。ここで少し考えてみてください。果たして私たちは、自分自身の罪に対して普段どんな考えを持っているでしょうか？私たちは日々の生活の中にあって、みことばを読んで祈り、神様のために生きていこうとします。そんな中であって、私たちは神様の前に喜ばれない思いや考え、態度を見るのです。私たちはその罪をどのように扱い、それに対してどのような態度をとっているでしょうか？パウロの言っているように、それらの息の根を真っ先に止めようとする、罪に対してそういった真剣な態度で向き合っているでしょうか？罪を罪として扱って、神様の前にますます喜ばれることをしたいと心から願って生きているでしょうか？それともその罪を見て見ぬふりをしたり、そのまま放置していたりするでしょうか？罪を単なるミスや失敗と軽く考えて、いろいろな理由を持ち出してきて、これはもう仕方がないことだと、自分の罪を正当化しようとしているでしょうか？かつての神様に逆らい、神様を喜ばすことのなかった古い自分を、みずからのうちに見るのであれば、私たちはみずからのうちにある古い自分を殺してしまおうと、真剣な心構えで向き合っているでしょうか？

パウロは別の箇所でもこんなふうに述べていました。ローマ6：11-13に「:11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。:12 ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。:13 また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」と書いています。義とされた者として、生かされた者として、自分自身を神様に捧げていくことが言われていました。自分自身の罪をごまかしたり、そのままにしたりするのではなくて、その息の根を止めてやろうと、神様を喜ばせない思いや考え、そんな罪の性質を断つことを熱心に求めていく、そんな真剣な心構えを新しくされた者というのは持っているのです。それが新しくされた者にとってふさわしい罪に対する応答でした。

でも、罪を殺してしまわないといけないというのは、少し厳し過ぎませんか、余りにも極端な考えではないでしょうかと思う人がおられるかもしれません。そのことに熱心になることは、自分にも必要なのでしょうかと。もしそんな考えを抱いているのであれば、よく覚えておいてください。罪というのは、私たちが惑わして、だまして、私たちの心をかたくなにする大きな危険性を持っているということです。罪は放っておいても、何も起こさないようなものではありません。ヘブルの著者ははっきりとこう口にしていました。ヘブル3：12-13に「:12 兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。:13 「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」と書いています。もし罪がだれかを惑わすことがなければ、かたくなにすることがなければ、ヘブルの著者はこんなことばを口にする必要も

ありませんでした。もし罪というのが、定期的にだれかを攻撃して、定期的にだれかをかたくなにするようなものであれば、ヘブルの著者はここで「日々」とは言いませんでした。「きょう」やりなさい、それだけ罪というものは、緊急を要する危険なものだということです。私たちの心をかたくなにしてしまう危険を持っている、私たちのうちから取り除かないといけないものだということです。神学者のジョン・オーエンも、かつて自身の著者の中でこう述べていました。「生きている間は、常にその務めを果たしなさい。一日たりとも休んではなりません。罪を殺しなさい。さもないと罪があなたを殺すでしょう。……死んでいない罪は必ず二つのことをもたらします。それは魂を弱らせ、その活力を奪います。またそれは魂を暗くし、慰めと平安を奪います。」と。

忘れてはいけません。罪は確かに私たちの心を惑わしてだますものだということです。罪はあたかも本当にそこに喜びや楽しみがあるかのように約束することがあります。神様ではなくて、ほかのものにこそ満足が見出されると、人々を惑わし、神様から人々を遠ざけようとすることがあります。それに加えて、罪はたとえその罪の選択をしたとしても、そこには何の問題も結果も伴わないと欺くのです。それをしても自分には何の結果も伴わないと思うから、罪は悪いとわかっているのに、それをしてしまうのです。でもそれは大きな間違いでした。罪は約束したことをもたらすこともなければ、大きな結果を人々にもたらすものだったのです。

そのことは歴史も、みことばも、私たちにはっきりと教えてくれていました。アダムとエバのことを思い出してみても、まさにそうだったのです。神様に逆らった罪の結果、罪が世に入り、世に死がもたらされました。また今の人々が罪に陥った結果として、その人のあかしが失われてしまったり、ほかの人との関係が壊れてしまったりすることも実際にあります。罪は確かに一時的な喜びをもたらすことがあったとしても、結局神様や真理から私たちを遠ざけ、私たちのうちにある神様に対する愛や熱心さを冷ますだけでなく、その心にある平安や慰めを奪うのです。自分自身のうちに罪をかたくなに保ち続けていけば、それを告白して悔い改めることを拒み続けているのであれば、私たちのうちから喜びが失われていくのです。私たちの心に罪悪感が増し加わってくるのです。罪は私たちをだます狡猾なもので、非常に危険なものだったのです。それが、みことばが私たちに教えてくれていることでした。だからこそ新しくされた者は、たとえそれが小さな罪でも大きな罪でも、どんなものであっても、それにきちんと向き合うことが必要でした。今の私たちひとりひとりも、神様の助けによって、ますますそういった古い自分から離れて、罪の息の根をとめる者として歩んでいくことが大切だったのです。それが、みことばが私たちに命じていることでした。

●信仰者が殺してしまうべき五つの罪：

パウロは罪を殺してしまいなさいと言っただけでなく、5節の中で具体的に、信仰者が殺してしまうべき五つの罪を挙げていました。もちろんこれが全部ではありませんけれども、一つずつ考えてみましょう。

a) 不品行（ギリシャ語：ポルネイア）

5節に「地上のからだの諸部分、すなわち、不品行」と書いています。一つ目に挙げられていたのは「不品行」でした。ここで用いられているもともとのギリシャ語は、“ポルネイア”というものです。このことばは、現在も使われている“ポルノ”ということばの語源にもなっているものでした。「不品行」ということばは、性的な罪に関して、特に結婚以外、夫婦関係以外で行われるあらゆる性的な行為のことを表していました。不貞や姦淫、婚前交渉といったものもこのことばに含まれていました。そして少し頭の片隅に覚えておいてください。この不品行という問題は、当時の社会においてはありふれていました。人々の間において、ごく自然に受け入れられているようなものだったのです。もし町に出て行って、いやいやそんなことをしてはだめですよなどと言えば、いったい何がだめなのですか、周りの人たちもみんなやっているではありませんかと答えるような、そんな扱いを受けるようなものだったのです。それ

が当時の社会でした。でも今の私たちの時代も何も変わっていません。ある統計によれば、日本で結婚した夫婦の3組に1組が離婚すると言われていています。そしてその原因で最も多いのが性格の不一致でした。次に暴力、そして浮気や不倫といった異性関係の問題が原因となっています。またそれだけではなく、別の統計によれば、日本の半数から9割近いカップルが、今、婚前交渉を済ませていると言われていています。それだけの人たちが結婚する前に性的な関係を持っているのです。ですから、間違いなくこの不品行という罪は、現代の社会においても私たちの周りにあふれています。

でも、私たちの周りにあふれているから良しと、当然みことばは言いません。パウロは不品行の問題を抱えていたコリントの教会に対して、例えばこんなことをはっきり告げていました。Iコリント6：9に「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者……」と書いてました。いったい「正しくない者」とはどんな者かということで、一つ目に出てきていたのは「不品行な者」でした。また同じ6：18－20でも「：18 不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、不品行を行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。：19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。：20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」と言われていました。

不品行は大きな問題を抱えていました。不品行に支配されている者は神の国に入ることができないというだけではありません。信仰者にとって神様によって買い取られた、もう自分自身のものではない自分のからだを、自分のために用いるということは大きな罪でした。自分のものでないものを自分のために用いることは間違っていたのです。例えば、もしだれかが私たちの所有物を何度も勝手に使って、ひどく汚したとしたら、私たちはその人に何と言うでしょう？なぜそんな勝手なことするのですか、そういうことはやめてくださいと、私たちだって言うでしょう。代価を払って買い取られた私たちも同じだということです。また、忘れてはいけません。キリストの死という大きな犠牲によって買い取られた私たちのからだは、もはや自分のためのものではないということです。それはただ神様の栄光を現すためにこそ用いられるべきものでした。不品行から離れて聖さを求めていくということ、それが神様の前に喜ばれることだったのです。Iテサロニケ4：3にまとめてこう書いていました。「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、」と。神様のみこころは私たちが聖くなること、不品行を避けることでした。不品行は、間違いなく深刻な問題をもたらします。社会の中において、大きな問題をもたらしているだけではありません。教会の中においても同じです。この罪によって、家庭や夫婦関係が壊れてしまう、信仰者や教会がそのあかしを失ってしまうこともあるのです。そういった性的な罪から離れているということは、新しくされた者にとって欠かせないことでした。

b) 汚れ

また、次に挙げられていたことばは「汚れ」でした。このことばは、不品行よりもさらに広い意味で用いられて、不潔さや汚れているということを表し、特にこの文脈においては性的な罪に関連して不道徳で、ふしだらな行為を表現していました。このことばと先ほどの不品行との大きな違いは、私たちの目に見える実際の行動に現れる性的な罪だけにとどまらず、ことばやふるまい、考えや意図といった部分までも含んでいます。要するに「汚れ」というのは、実際の行動だけではなく、その行動の背後に存在している間違った内側の態度も表していたのです。もちろんすべてをご存じの神様の前には、外側だけではなく、聖くない内側の考えや思いに至るまでが大きな罪でした。新しくされた者は、そういった汚れから離れることも必要でした。Iテサロニケ4：7に「神が私たちに召されたのは、汚れを行わせるためではなく、聖潔を得させるためです。」と書いています。それが二つ目でした。

c) 情欲

d) 悪い欲

次に三つ目と四つ目に、続けて「情欲、悪い欲」ということばが挙げられていました。並んで出てきている二つのことばは、非常によく意味が似ています。「情欲」という方は、聖書で肯定的にも否定的にもどちらの意味でも用いられていて、何かに対して私たちが持つ強い願望、感情的な願いを表しています。ある辞書はこのことばを「情欲とは、満足するまで落ち着くことのない衝動や勢い」と定義しています。ある人が何かを手にしたと心の中に強い欲を持っているのであれば、それに駆られてせわしなく落ち着かなくなっている様子です。もちろんその欲や願いのベクトルが良い方向に向いていれば、それは何の問題もありませんけれども、もし悪いものに向いているのであれば、特にここでは性的なものに向いているのであれば、当然その強い欲や願いは大きな罪や間違った行為をもたらすことになるのです。

また「悪い欲」という続きのことばもほとんど同じですけれども、これも何かに対する強い欲、また禁じられているものへの切望、渴望といった意味があります。ですからこの「悪い欲」ということばも、間違ったものに対して抱いている人の内側の心の願望のことを表していました。

さて、パウロはここまで「不品行、汚れ、情欲、悪い欲」と四つのことばを並べていました。これは適当な順番ではありません。これらは私たちの外側に現れる性的な罪から、徐々に内側に潜む罪へと順番で並んでいたのです。不品行が外側に現れる行為であれば、情欲や悪い欲は私たちの内側に持っている強い、間違った性的なものに対する欲を描いていました。言いかえると、私たちの心に悪い欲や願いがあれば、その欲や願いが私たちの考えや思いを支配するようになり、そうなればそれによって私たちの行動までもが支配されるようになっていくのです。イエス様もこれと同じことを教えていました。マルコ7：21-23に「：21 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、：22 姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、：23 これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」と書いています。だから私たちにとって心が何によって支配されているのかということは、余りにも重要なものでした。私たちは幾らだって外側のふるまいだけをよく見せることはできます。あたかも何の問題もない信仰者のひとりとして、人前で取り繕うこともできます。でもすべてをご存じの神様の前に問われるのは、外側だけではなくて何より内側のころでした。そして今まで、罪を殺してしまいなさい、息の根を止めてしまいなさいといった話をしてきたのですけれども、私たちがそれを望むのであれば、最も中心となるその根の部分に御霊の助けによって殺してしまわなければいけないということです。特に性的な罪について書かれていましたけれども、いったい何がその罪の中心にあるのでしょうか？不品行や汚れといった性的な罪の最も深い根の部分は何なのでしょう？

●) むさぼり

パウロは五つ目にそのことを教えてくれていました。最後五つ目に5節「そしてむさぼりを殺してしまいなさい」と書いてありました。最後は、「むさぼり」でした。「不品行、汚れ、情欲、悪い欲」、その根底にあるものはむさぼり、貪欲さでした。この「むさぼり」ということばは、もともと「もっと」ということばに「持つ」ということばがくっついて一つのことばになっています。これがくっついたら、そのまま「もっと持つ」ということです。もっと言うのであれば、このことばは自分が持っていないもの、自分が手にするべきでないもの、自分のものでないものを、もっとどうにかして手に入れたいという強い欲求を表しているのです。それが「むさぼり」でした。まさに十戒の最後で言われていたことでもありました。出エジプト記20：17に「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」とあります。そしてこのむさぼりこそが性的な罪の最も深い根の部分なのだというのです。よく考えてみるとそうですね。もし私たちが自分の持っていないものを欲しい欲しいと強く願い始めれば、もし私たちが自分には与えられていない、神様の前にふさわしくない物を手にしたい、手にしたいと貪欲になり始めてしまえば、このむさぼりが結果として私たちのうちに大きな罪を引き起こすことになるのです。

覚えておいてください。信仰者にとって、例えば不倫だろうが、姦淫だろうが、そういった異性の問題も、それ以外のさまざまな罪であろうとも、多くの場合は一夜にして起こるものではないということです。小さな積み重ねがそれを引き起こすのです。もしかしたら、例えば初めはテレビで一瞬だけ目にした些細なものかもしれません。でもその小さな一瞬見たものが目に焼きついて、それをどうにか手にしたいと心が望むようになれば、今度は本やインターネットなどを使って、みずから頻繁に探すようになり、そして遂には実際の罪の行動に移すことになるのです。むさぼりというのは、罪の根源となる存在で非常に危険なものでした。

でも、それだけではないのです。ここでパウロは、このむさぼりに関して、興味深いことを述べていました。5節の最後で「このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです」と言っていました。少し考えてください。いったいどれだけの人が自分たちのむさぼりというものを偶像礼拝として考えるでしょう？自分自身の欲や願いに支配されているときに、今、自分は偶像を礼拝していると考えているのでしょうか？多くの方がそんなふうには思っていないかもしれません。でもみことばが教えてくれていることは、まさにそうでした。パウロは同じことを別の箇所でも述べています。エペソ5：5を見ると、「あなたがたがよく見て知っているとおりに、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者——これが偶像礼拝者です、——こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。」と書いています。神の御国を相続することはできませんと、はっきりと言われていました。いったいどうしてむさぼりが偶像礼拝なのかというと、それは私たちが貪欲になっているとき、私たちが何かを欲しい欲しいと思っているとき、私たちは神様に感謝することを忘れ、神様のうちに満足を見出すのではなく、それ以外のものに満足を見出そうと熱心になっているからです。私たちが自分のものではない何かを欲しい欲しいと思っているときに、自分に与えられていないものを手に入れたい、手に入れたいと思っているときに、私たちは神様をほめたたえることも感謝することも忘れて、神様のうちに満足することも忘れて、それ以外の何かを自分の神としてほめたたえようとしているのです。ほかの何かに自分の満足を見出そうとしているのです。

むさぼりの抱える問題はここにありました。神様や神様の与えてくださったことに満足しないということ、これが大きな問題だったのです。貪欲な人というのは、いつもすでに与えられているものよりも、自分が持っていないものを、自分が手にするべきでもないものをどうにかして手にしたいと追い求めているのです。この状態を言いかえれば、私たちは神様に対してこう言っていることと同じになるのです。神様、あなたが私に与えてくださったものは十分ではありません。自分にはまだ手にしていない自分にはもっとふさわしいものがあります。あなたが自分に与えてくださったその伴侶も、あなたが私に与えてくださったその家族も、家も財産もお金も持ち物もありとあらゆるものも、それ以外の多くの恵みも全部私には満足することができません。そんなものではなくて、私は自分が自分にふさわしいと思うものを手にしたいと思えますと。もちろんこれは間違っていました。このむさぼりがあれば、不品行も汚れも情欲も悪い欲も出てくるのです。神様にあって満足するのではなく、神様以外のものに満足を見出そうとする態度、神様に礼拝をささげるのではなく、神様を自分の欲と取りかえようとする態度、そんなむさぼりこそ偶像礼拝でした。だから、そんな偶像礼拝であるむさぼりの根源を殺してしまう必要があるとパウロは言っていたのです。その大もとの問題を断ってしまいなさいと。

でもどうやって断つのでしょうか？これからいろいろなことを見ていきますけれども、一つ言えることは、私たちがただ神様をほめたたえて、神様に心から感謝して、神様の与えてくださったものに信頼して満足することです。むさぼるのではなく、私たちが神様から与えられているものがあるのであれば、それを心から感謝して、もし与えられていないものがあるのであれば、与えられていないことに感謝をする。そしてそういったものを感謝するだけではなく、何よりも神様というそのお方に心から感謝を持って、その方に満足を見出して歩み続けていくのです。そうやってむさぼる思いを殺してしまうのです。

●古い人を脱ぎ捨てるべき二つの理由：

さて、ここまでパウロは古い自分を殺すようにと命じてきました。新しくされた者として、救われた者がみんな自分の罪から離れていくことを求めていたのです。そして、最後に、パウロは単にここで命令を与えていただけではありませんでした。それに加えて、どうしてその命令に対して私たちが忠実であるべきなのかという二つの理由を教えてくださいました。

1) 古い生き方には神様の怒りが下るから 6節

どうして私たちがその命令に対して忠実であるべきなのか、一つ目の理由が6節に、「このようなことのために、神の怒りが下るのです。」と書かれていました。古い生き方には、神様の怒りが下るからでした。かつてのそういった生き方は神様の怒りが下るようなものだったのです。もちろん勘違いしてほしくないのは、ここで神様の怒りが下りますと言ったときに、これはたとえ救われている者であろうと、罪を犯せば神様の怒りに遭いますよということを警告されていたのではありません。感謝なことに、みことばは繰り返し、キリストを心から信じ受け入れた者はだれであれ、もうすでに神様の御怒りから救い出されたのだとはっきりと約束してくれていました。ローマ5：9にもこう書いています。「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」と。

ではいったい何をパウロは言わんとしたのでしょうか？それは、キリストによって新しくされた者は、かつての神様の怒りに値した生き方には、みずから近づこうとはしないということです。そのようなものからは喜んで離れようとするということです。考えてみてください。キリストによって生まれ変わった私たちも、以前の歩みを忘れてしまったわけではありません。かつて私たちは、神様ではなくて、自分の欲や願いを満たすことに喜びを見出し、自分の性的な思いや汚れた考えに楽しみを見出す者として歩んでいて、神様以外のものに満足を見出し、何よりも自分自身を中心として生きていたのです。でもそんな自分がキリストと出会ったときに、そのすべてがどれほど神様の前に受け入れられることのない罪なのかということを知りました。そうやって神様に逆らっているその生き方が、歩みが、神様をどれほど悲しませて、怒りをもたらすものだったのかということに気づかされたのです。だから、新しく造り変えられた者は、まるで愛する自分の親の喜ぶことをしたいと願う子どものように、神様を正しく恐れて、この方を何よりも愛しているからこそ、罪から離れて、神様が憎んでいる罪を自分も憎んで、神様の愛している聖さを熱心に求めていこうとするのです。かつての古い生き方には、神様の怒りが下ることを知っているのであれば、そういったものから離れたい、そういった罪を殺すことに熱心であろうとするのです。

2) 古い生き方に対して死んだ者であるから 7節

それだけではなく、二つ目の理由が7節に記されてきました。7節に「あなたがたも、以前、そのようなものの中に生きていたときは、そのような歩み方をしていました。」とあります。二つ目の理由は、古い生き方に対してもう死んだ者であるからでした。古い生き方に対して死んでしまった者であるからこそ、私たちは罪をますます断って歩んでいこうとするのです。パウロは、これまでも何度も何度もコロサイの信仰者たちに対して、この揺るがぬ事実を繰り返し教え続けていました。キリストにあって、彼らがどんな者へともうすでに変えられたのかということをお出し続けていました。少し戻って、コロサイ1：13を見ると、そこに「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」と書いていました。少し飛んで1：21-22を見ても、「：21 あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあつたのですが、：22 今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。」とありました。かつては私たちも例外なく罪の中に死んで、神様から離れ、敵として歩んでいました。でも、そんな者たちが今は恵みによって救われ、キリストと一つとされ、新しい歩みをする者へと変えられたのです。私たちも同

じです。キリストを信じ救われた今は、私たちはもうひとりで歩んでいるわけではありません。救いにおいても、霊的成長においても、私たちに十分な力と知恵を与えてくださり、私たちを支えてくださるのに余りある存在が、完全なキリストがいつもともにいてくださるのです。キリストにあって、私たちは歩いていくのです。

もうすでにあの十字架にあって、すべての敵を打ち倒して、罪も、死も、またサタンさえも打ち負かした圧倒的な勝利者である主が、私たちとともにいてくださるのです。その主が私たちに助けを与えてくださるのです。だからこそ、私たちもこの勝利者にあって、勝利者として歩いていくことができます。どんなときも十分なキリストの力にあって、罪に勝利していくことができるのです。そんな主とともに歩んでいるから、私たちはかつての生き方に戻りたいと思うのではなく、そのようなかつての生き方から救い出された者として、罪を殺すということにおいて、罪を断つということにおいて、熱心になるのです。それが二つ目の理由でした。

さて、私たちはきょう5-7節を通して、新しくされた者が罪に対してどう応答すべきなのか、一つのことを見てきました。自分自身の罪を殺してしまいなさいと。皆さん、忘れてはいけません。今週1週間、これから日々の生活が始まれば、いろいろな誘惑や罪との戦いが待っています。そのときに、自分の力ではその罪に対して勝利することはできません。でも私たちは希望を持っています。どんな希望をかと言うと、その罪の力に勝利された十分な方が私たちとともにいて、その方に私たちは信頼して歩いていくことができるということです。勝利するための力も知恵も、私たちはこの方のうちにすべてを見出すことができます。それならば、私たちはみことばを通してキリストに思いを留め続けることです。この世のことではなくて、地のことではなくて、天にあるものに思いを留めて、キリストに思いを、めぐらせ続けて、この方に助けを求めながら歩いていくことです。私たちの大祭司であるこの方は、私たちの弱さに同情してくださるお方だと、聖書は教えてくれていました。この方のもとに行くことです。この方に助けを求めながら、自分のうちにある罪を完全に断っていくことです。キリストに喜ばれる者として、神様をますます愛する者としてともに歩いていきましょう。